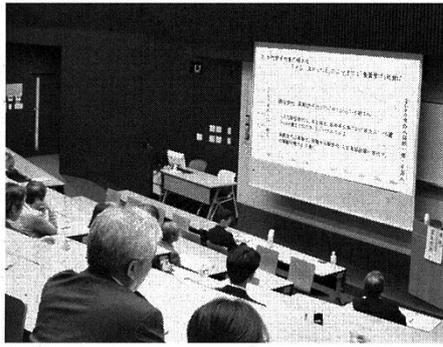


これからの福祉大の役割を考える 福経協 設立10周年記念講演会を開く

福祉人材養成に取組む全国26大学(私立25大学・公立1大学)で構成する「福祉系大学経営者協議会(福経協、丸山悟会長)」は、2009年6月の設立から10周年を迎えた。これを記念して、去る6月14日(金)、国際医療福祉大学東京赤坂キャンパスで設立10周年記念講演会を開催した。参加者約70人。団塊ジュニア世代が65歳を迎え始める「2040年」の社会を展望し、これからの福祉人材養成課題と福祉系大学が果たす役割を考える契機とした。

開会にあたり、会場校の国際医療福祉大学の髙木邦格理事長(福経協理事)が挨拶。「本学は「共に生きる社会」の実現を理念としている。昨



参加者約70人を迎え講演会

冒頭の基調講演では、「共生保障」2040年に向けて」と題し、中央大学法学部教授の宮本太郎氏が講演。2040年を越える「シジョン」と地域共生社会をつつこっていくのかを語った。

まず2040年の日本では、世代間、地域間、財源・支出間の不均衡が極大化する指摘し、現状の福祉では、はつきりした困難を抱えた人を継続的な行政対応で保護していたが、これからの福祉では、元氣になってもらうことを目標に、早期に包括的支援を行うことが必要だと述べた。また、「支える側(現役世

代)、「支えられる側(高齢世代)」、「二二分法」の支え合いが成り立たなくなってきたという中、若者男女とおして元氣人口を増やしていくことが求められるとし、その観点から地域共生社会のかたちの先進事例や地域に必要な共生保障のかたちを示した。

続いて、「これからの福祉人材養成課題と福祉系大学の役割」をテーマにシンポジウムを実施し、2人が報告した。まず、福経協の丸山会長(日本福祉大学理事長)が報告。福祉系大学は、複合化が進む学部・学科再編の影響で学生募集が回復基調にあるが、これまでは「シジョン」部であった。要因は①看護師等の業務独占資格獲得が台頭する中で社会福祉人材の「専門性」の焦点が希薄化、②資格系学部で幅広い能力(汎用性)が必要とされるもの

の、時代が求める汎用的能力の点では「不足」を懸念し、③わかりやすい世界として「福祉」の「介護」のイメージが固定化していたことであると説明。回復基調の要因は、一、地域共生社会、二、総活躍社会(一人一生100年時代)など福祉に関するキーワードが取り上げられる中で、8050(7040)問題等の福祉問題がクローズアップされ、社会における福祉的アプローチの必要性が浸透してきていることによりと説明した。

これらの福祉系大学の役割としては、社会福祉士が名称独占資格であることを最大限に活用し、高校生に対する福祉を学ぶことの価値・魅力の発信が重要と述べた。2040年には福祉人材の需要がますます高まると見込まれる中、技術革新の知識・技能をもち、他の専門職をリードして複合化した問題の解決にあたることのできる人材」や、「福祉の尖った専門性を持つ人材」が不可欠となる。従って

福祉系大学には、教養・基礎教育のカリキュラムの再編をはじめ、「学部3年生前半までは、時代の求める汎用的能力を身に付けた上でソーシヤルワークの理論・技法を磨く。学部3年生後半からは出口を意識して突き出した専門性を磨くことを重視し、大学院進学も視野に入れた進路を支援する。教育体系づくりが求められる」と課題を提起。そのためには、教育の「質保証」の課題を検討しつつ、福祉系大学同士の間連携の強化をはかり、認定社会福祉士や大学院の位置づけも考えていくべきではないかと結んだ。

次に、「2040年に向けて、福祉系大学として「社会で活躍できる力」をどう育むか」と題し、淑徳大学大学院総合福祉研究科長の戸塚法子氏が報告。2040年に向けた福祉人材養成の課題を提起した。

今後のソーシヤルワーカー養成教育では、「包括的支援体制のなかで「アセスメント・マネジ

メント・コーディネートができる力」と「ジェネリックな支援能力」の習得が求められると説明。中でも「ジェネリックな支援力」を習得させるには、法制度の改正だけでなく、法制化の修正だけでなく、陳腐化する「暗記型の福祉知識」ではなく、人権や社会福祉の価値に基づいた「対人支援の知識」が不可欠であり、相談援助に関わる様々な演習・実習・講義科目に正課外教育を組み合わせた独自の教育機会を創出して実践力を養うことが必要だとした。

また2040年に向けては、「高度な福祉専門職養成に加え、福祉援助教育に携わる研究者・実践家たちが積み上げてきた福祉マインドや対人支援スキルを他分野にも輩出できるように汎用化させていくことが求められる。福祉系大学が「丸ごと」で、福祉マインドの例に出したが、その他AIが代替できない領域と連携し、どう福祉人材の養成を進めていくかも問われている。また、大学卒業直後だけでなく、経験を積んだ後に福祉の仕事に就きたいと希望する

これらの報告を受け、コメンテーターとして宮本氏は、福祉系大学への期待を次のように述べた。「まっくくり」もはや福祉技きでは語れなくなってきたおり、「福祉で、まっくくり」が求められている。福祉分野の人たちが福祉領域の外にどう足を踏み出せるかを、具体的に考えていただきたい。まっくくりを例に出したが、その他AIが代替できない領域と連携し、どう福祉人材の養成を進めていくかも問われている。また、大学卒業直後だけでなく、経験を積んだ後に福祉の仕事に就きたいと希望する

人々を支援する仕組みも、本協議会加盟大学の連携の中で作られることに期待したい。

最後に、福経協の長谷川匡俊副会長(大乗淑徳大学園理事長)より、「人材養成課題に真摯に取り組んでいきたい」との挨拶があり、閉会した。

て、福経協のキヤッチコピー「幸せをつくる人をつくる」の意味を改めて問われた気がした。10周年を節目として、これからも会員校が一致して人材養成課題に真摯に取り組んでいきたい」との挨拶があり、閉会した。

人々を支援する仕組みも、本協議会加盟大学の連携の中で作られることに期待したい。